

だし、偉かったな。

**奥田** 小説『忍ぶ川』を書いた三浦哲郎さんですね。

**幸綱** そう。あと、小説家の宮原昭夫、後藤明生さんがいて、よく飲んだね。明生さんが一番よく飲んだかな。そういうメンバーが毎月一回、「早稲田文学」が借りていた四谷三丁目のマンションの一室に集まって、編集会議をやっていた。そのとき、できるだけ早稲田の学生からいい小説家を出したいということで教室で宣伝した。小説を書いている奴は持って来い、ってね。まだ「文芸学科」がない時代だったね。宣伝がきいて、「早稲田文学」編集部に送ってきたり、教室で手渡しされたりいろいろあった。

**朋子** はそういうなかの一人だった。もう一人、いま「心の花」にいる森部信次君。森部君の小説は一度、「早稲田文学」に載せた。

**加古** 森部信という名前でした。

**幸綱** 集まった原稿は何人かの編集委員が読んで、月一の選考会でいろいろ批評して、「早稲田文学」に載せる載せないを決めるということにしていました。今「早稲田文学」

は季刊で年に四冊しか出ていないが、当時は月一で出ていた。あまり厚くはなかったけど。半年先くらいに掲載されるものを決めるわけだね。だから、掲載されるまでの間に、書き直せとか、この部分はどうかって、そんな感じでやっていました。

**何人かのそんな学生のうちの一人として、朋子がやってきて、話をしはじめるようになった……。(キツチンの朋子さんに向かって) そうだよな(笑)。**

**黒岩** 朋子さん、何をテーマに書かれたか、覚えていらっしゃいますか。

**朋子** ……。(キツチンから声なし)

**幸綱** 感覚的なものだったね。

**高山** 因みに作品は掲載されたんですか。

**幸綱** いや、掲載しなかった。

**加古** 小説ですか。

**幸綱** 小説です。原稿用紙で二十枚から三十枚くらいで、いわゆる筋はあまりないような小説だった。

**黒岩** なるほど、朋子さんの短歌もそんな感じですからね。昔、僕が学生のころ、幸綱先生と初めて飲ませていただいたとき、朋子さんとの馴れ初めみたいな話を伺ったわけですけど、そのとき先生がおっしゃっ

たのは、「小説を書いて来た。内容はともかくとして、もう一回書き直しておいでよと言った。それは、もう一回会いたかったからだ」ということだったような気がするんですけど(笑)。

**奥田** 会うためにダメ出しを?(笑)

**大野** 森部さんは第二文学部ですけど、朋子さんの学科はどちらでしたか。

**幸綱** 第一文学部。当時、俺は第一文学部、第二文学部、両方授業をもっていたんじゃないかな。跡見女子大に勤めていたときで、早稲田は非常勤だった。

**高山** 月並みな質問ですけど、初対面の印象はあるかないか。あればどうだったのか。

**幸綱** 初対面は覚えてないよね。よく、「僕万智と最初に会ったとき、どうでしたか」とか聞かれるけど、そんなの、覚えてないよね。大学では、二〇〇人以上いるんだものね、学生が。

**高山** じゃ、少なくとも一目惚れではなかった。

**黒岩** いや、それは朋子さんに訊かないと。

**大野** やっぱり一目惚れだったんじゃないですか。

**加古** 小説を持ってくる学生はそんなに多